事務局 amateur スタッフによる

フォロー・アップ メモ・ランダム

早川和子作画(一部改)

今年(令和元年)6月に奈良文化財研究所の最新研究で、平城宮では重要儀式で7本ののぼり旗を横一列に並べていた実態が明らかになりました。三年前には藤原宮跡で見つかった幢幡の設置跡は、中央に1本、その両脇に三角に3本を並べる形態だったことが発表されています。並べ方の変更は、天皇の権力のあり方の変化を象徴している可能性があるといいますが、三足烏を除いた太陽、月、**朱雀**、**白虎**、**青龍**、**玄武**といった**四神**の意匠は高松塚・キトラの古墳壁画と共通しています。701年に文武天皇が朝賀の儀式(上図)で使用したのが嚆矢とされ、孝明天皇の代まで形状を凡そ変えることなく使われたこれらの意匠は、中国の皇帝が使用したシンボルの影響を強く受けていたようです。続日本紀には「文物の儀、是に備われり」と結び、学問や法律などが整って律令国家が誕生したとの宣言ではないかと考えられています。

さて、廣瀬先生の宿題を考えて見ましょう。平城京遷都(710年)以降は、身分の高い人は平城京の近くに墳墓を築き、藤原京の近くには埋葬されることはありません。従って、藤原京近くの高松塚の被葬者は、平城京遷都の前に亡くなった人物であるというのが大勢だそうです。ただ、後述する石上朝臣麻呂は、藤原不比等によって藤原京留守司とされたため、平城京遷都後も平城京に入れなかったので、藤原京の近くに埋葬されてもおかしくない人物だそうです。

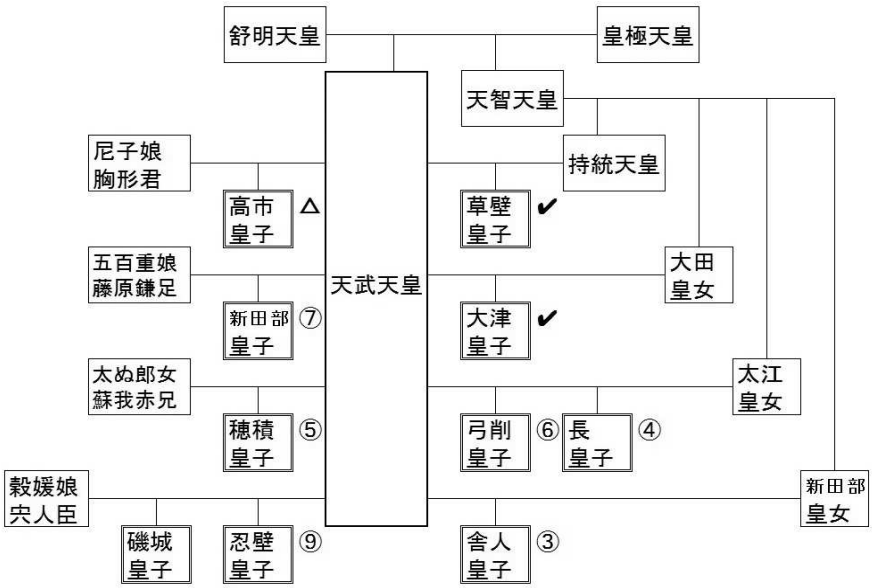
まず、壁画の人物にさしかけられた笠が深緑であることから、被葬者が一位であることが分かります。女子が褶(ひらみ:裳や袴の上につけた衣服)をつけていることや、襟元が左前になっていることから、褶の着用が許された702年以降から左襟禁止令の出た719年以前に壁画が描かれたことが分かります。被葬者は、702年～719年に亡くなった人物だと想定されます。

次に、副葬されていた「海獣葡萄鏡」の同笵鏡が、中国の西安の唐代古墳である独孤思貞の墓から出土していて、副葬された鏡は704年に唐から戻った遣唐使が持ち帰った鏡ではないかと考えられています。

廣瀬先生のレジュメにも高松塚古墳の被葬者候補として(a):皇族(天武天皇の皇子)、(b):上級官僚、(c):渡来系氏族が挙げられています。具体的には(a)として直木孝次郎氏、王仲珠氏などが忍壁皇子を、梅原猛氏が弓削皇子を挙げています。また(b)としては岡本健一氏や白石太一郎氏が石上朝臣麻呂を挙げています。古代史ファンの中には高市皇子だと考える人が多いようですが、専門家は石上朝臣麻呂の可能性が高いと思われているようです。

廣瀬先生は文武天皇に仕えた人物なら遷都後に亡くなっていても旧都近くに埋葬されても良く、文武天皇に近しい天武天皇の皇子が被葬者であるとお考えです。下の図は天武天皇の皇子を中心に作成した系図です。天武天皇は兄の天智天皇の娘を四人も妻に迎えて5人の皇子を儲けています。また有力豪族の娘を母とする皇子もたくさんいます。いわゆる「吉野の会盟」において、草壁皇子が「兄弟、幼長あわせて十余の王(みこ)」と発言していますので、この図の他にも数名の皇子がいたようです。

天武天皇が亡くなると**大津皇子**は謀反の疑いをかけられて失脚します。天武と持統が皇位を受け継がせたかった**草壁皇子**も病没してしまいます。壬申の乱で大活躍した**高市皇子**も藤原京が完成する前に亡くなっていますので、彼ら3人は被葬者ではなさそうです。遷都以降と考えるなら**忍壁皇子**(705年没)も外れます。続日本紀には天武天皇の皇子たちが薨られたときの記事が載っていますが、末尾に“天武天皇之第〇皇子也。”と付されています。図中の数字が続日本紀に書かれた各皇子の数字ですが、当時の政権が考えていた皇位継承順位のようなものでしょうか。第三皇子の**舎人皇子**は『日本書紀』の編纂を主宰するなど事績も豊富ですが、没年が735年で遅すぎるかも知れません。事績は多くありませんが、715年に薨じられた**長皇子**が高松塚の被葬者なのかも知れません。



※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　(体裁は自由ですが、文書でお願いします)